

# 「山の段」の構造

—「妹背山婦女庭訓」研究—

松崎仁

はじめに

「妹背山婦女庭訓」（明和八年大坂竹本座初演）は近松半二の傑作であつて、内山美樹子氏の評に「多くの先行作から筋、趣向、文辞の複雑な撰取を行ないながら、彌縫の跡を全く留めず、明晰な筋立て、端正な構成、詞章の優美、舞台の華麗と均斉——古典主義的時代淨瑠璃の代表作」（注1）とあるのは、當を得たものと思う。中でも三段目切「山の段」は古典劇的均斉美を具え、明治の近松研究会以来多くの研究が重ねられた。半二の作品中では最もよく理解されたドラマの一つと言つてもよい。

しかし、それにもかかわらずなおさまざまな問題をほらむ作品であつて、現に近年発表された梅津美智氏の「「妹背山婦女庭訓」試論——山の段の解釈——」（注2）は、「従来解釈では説明し尽せない」、あるいは「従来あまり取り上げられることのなかつた」いくつもの問題に対して、精緻な究明を試み、これまでの解釈の矛盾を明らかにしつつ、テキストの読みを一段と深めた研究であつた。

「山の段」の構造 — 「妹背山婦女庭訓」研究 —

わたくしもこれまでの諸論考の成果に学びながら、主として「山の段」の劇的構造に対して一つの解釈を加えたいと思う。

—

本作の重要な劇的矛盾の一つである大判事・太宰両家の不和は、大序で大判事が「小式殿存生より。此清澄とは遺恨有<sup>ル</sup>家」と言うのを最初として、「小松原」では久我之助も「太宰の小式と我ガ父とは。故有て遺恨有<sup>ル</sup>家」と言い、雛鳥とは添うことのかなわぬ家同士であることが、強く印象づけられる。それを受けて三段目切「花渡し」では、大判事登場は最初から「不和成<sup>ル</sup>中<sup>カ</sup>の定高が屋敷<sup>キ</sup>。互<sup>イ</sup>にそれと白書院。目礼もせずつくと通り」と語られ、これを咎める定高のきびしい態度が続くから、観客は改めて両家の「遺恨」のなみなみならぬさまを目のあたりに見ることになる。

ところが、入鹿はこれを「表<sup>テ</sup>の見せかけ」とし、「内<sup>イ</sup>々には申<sup>シ</sup>合せ。古主の帝へ心を通はず」ものと断定する。この断定は當つていたのであろうか。入鹿が断定の根拠とするのは久我之助と雛鳥が密通しているということであるが、これは「小松原」で二人の

様子を見た宮越玄番のもたらした情報によつてゐるはずである。しかし玄番は役柄でいへば端敵の、しかも元來雛鳥に「大執心」の男で、腰元に吹矢で耳を射られた恨みさえある。観客は見て知つてゐるよつに、久我之助と雛鳥とはたつた一度口づけを交わしただけであるのを、玄番は誇大に密通と騒ぎ立てたはずである。それを入鹿は奇貨おくべしと採り上げ、断定の根拠としたのである。なるほど大判事が入鹿に従ふ本心は疑わしく見えたかもしれない。しかし、この時点で両家が反入鹿の秘密提携をしてゐるという断定は強引である。

この場合、それまでの大判事と定高が事ごとに反目しいがみ合う言動には、わざとらしきがあるとする読み方もありうるだろう。しかし前述のごとく、両家の確執は念入りに語られて来た。しかも大判事は古武士的な剛毅な人物、定高は太宰家の存続と名譽とを己が肩になう勝気な後室である。このあたりの対立を見せかけとするには無理がある。それよりもあの断定はやはり入鹿の意図的な強弁と見るべきではないか。というのは、入鹿が次の二つの狙いを持つてゐるからである。

その一つはもちろん入鹿が「后妃に定めん」としてゐる采女の探索であり(注3)、そのために久我之助を「目通りへ出ツ勤」させ、拷問にかけて采女のありかを糺明しようという狙いであり、もう一つは「潔白」のあかしを立てるために両家の子を入鹿のもとに差し出せという命令によつて、両家の不和をより一層深める狙いである。というのは、両家の子が命に従つて不本意極まる状況に陥るにせよ、命に背いて死ぬにせよ、その結果両家は、自分の子にこの不

幸をもたらした恋の相手を憎むはずだと、「邪智深カき入鹿」は読んでいるからである(注4)。江戸幕府が諸大名間の親和を警戒して、互に対立せしめることを計つた手法に甚だよく似た権力支配のあり方である。雛鳥に対する欲望は専制的権力者の貪欲な欲望には違ひないが、かねて執心の女というわけではなく、後宮に美女を一人加えるために、この機会を利用するにすぎない。

このように考えると、両家の不和確執はいまだに根深いもので、ひそかな政治的提携はありえない。

もっとも、定高は雛鳥を久我之助の姿が望見できる妹山の仮屋に「出養生」させていた。腰元はそれを「後室様の粹なお捌き」というが、この定高の処置は、服部幸雄氏がかつて言われたように、「できることなら仲直りをして」二人の恋を叶えさせてやりたいと思つていたことの現われと解しうる(注5)。その解釈を押し進めて「久我之助を婿として大判事家と和解し、ともに入鹿に抗」しようとする政治的意図を読み取る梅津氏の見解もあるが、これまで述べた解釈に基づいて、わたくしはこの見解を探つていない。定高のはからいは雛鳥の「病氣をいひ立テ」ての願ひを容れてのことである。彼女の心中の思ひはいかにも母親らしい娘への思ひやりであつて、まさに「できることなら」という留保つきで秘かに温めてゐる希望と見るべきであらう。定高はいくつかの場面で見られるように、一旦公的な場に出た時は、抗争の歴史を背負つて家の名譽を守ろうとする太宰家の後室として、毅然とした男まさりの振舞いを見せるが、私的な母親の心情はまた別であつて、この二面は必ずしも矛盾するものではなく、むしろこの二面性が本作の解釈に深くかか

わってくるわけである。

さて、思いがけず入鹿から秘かに手を結んでいると断定され、子供を差し出せという嚴命を受けた時点からは、入鹿の意図とは逆に、両家は一種運命を共にせざるを得ない立場に追い込まれて行くことになり、やがて互に相手の子供を助けようとする劇的過程を経て、最後には完全な和解に到達し、子供たちの愛を来世で実らせようと祈るに至る。その過程が「山の段」のドラマを形成するのである。

## 二

前項の終りでわたくしは定高の二面性に触れた。その一面は大序における彼女の行動によく示されている。言うまでもなくこれは入鹿叛逆以前の時点であるが、定高は「太宰の家相統の御願ひ」のため「ついに上らぬ雲の上」に進み出る。これは天皇による相統の認定を求めての行動であった。このように、女でありながら公的な場面で夫を失った後室としての責務を果たそうとしているのである。

しかしその反面「娘雛鳥に似合へしき智をもふけ」て家相統を願うというのは、「似合へしき」智がねを求めているという意志の表明とも受け取られる。事実これを聞いた玄蕃が、「是幸い」とかねて雛鳥に求婚していることを言い立てるくらいである。定高の願いは、このように私的な恋慕沙汰へと横すべりするような話題であった。だからそれが、戯曲世界の最も公的かつ政治的な対立抗争の筋が回転し始める大序の中でのことであるだけに、いかにも女性が申し立てるにふさわしい、大序の色どりという印象を与える。大序

「山の段」の構造 — 「妹背山婦女庭訓」研究 —

における定高の行動も、こうした二面を具えていたのである。

さて、大序に続く「小松原」で久我之助と雛鳥は恋に陥るが、雛鳥が去ったあと、久我之助は宮中を脱出して来た采女をかまくまう。これは「時雨」降る頃のことであったが、次の雪中の「蝦夷館」では入鹿の叛逆が成功し、大判事をも臣従せしめて初段は終る。

三段目は桜のさかりの雛祭の頃であるが、それまでの間に大判事は、采女を入水せしめた——それが見せかけであったことは後にわかるが——科によって、その付人たる久我之助を勘当し、久我之助は背山に「勘々気の山住マ居」をしている。雛鳥は妹山の「川へ見越」の下「館」に「おしつらひ(病氣)」の「出養生」をしている。雛鳥によれば、それは「病氣といひ立テ」て母に願い、久我之助の顔が見たさに来ているわけであるが、それについて定高の娘に対する思いやりがあったことは前述した。これに反して大判事は悻の恋を全く知っていない。

このような状況で三段目口「花渡し」は始まり、一で述べたように大判事と定高に入鹿の難題が課せられる。また、この場で入鹿は腹心の荒巻弥藤次に、香具山の上から大判事と定高の行動を「百里照の目鏡」を以て見張れと命ずるが、これは一種の魔力を持つ入鹿の命令として、大判事らの行動への一つの圧力となるものと受け取られる。

## 三

さて、「山の段」の構造は既に言い古されたように左右対称のパラレリズムを特色とする。そして大道具も背山・妹山はそれぞれ男

性的・女性的特色を示すように作られ、背山には簡素な経机、妹山には華やかな雛壇が飾られている。初演時に両床の掛合いを分担した背山の竹本染太夫の重厚、妹山の竹本春太夫の優美という芸風も対照的である。大道具の視覚的対照も初演以来のものであろう。

しかし最も本質的な対照は、双方の意識と行動原理の中にある。それを展開に沿って見て行くことにする。

マクラがすむと妹山の場面であるが、ここでは雛鳥はもちろん二人の腰元も、考えること話すこと、すべて「恋」に限られている。定高のことも「粹なお捌き」をする母親として噂される。そのあげくには腰元は障子を明けて、「せめて遠目に」久我之助の姿をと、縁端から身を乗り出し、雛鳥は封じ文に小石を添えて投げる。もちろんそれは届くはずもなく、川に落ちて流れ去り、雛鳥の嘆きは深まる。

これに対して背山では、久我之助は「うつく」と物案じにふけていて。その案ずるのは「父の行々末身の上」であり、それは入鹿に臣従した父の運命についての不安である。そこに妹山から石が投げられた。しかし久我之助はそれを恋のたよりとは全く思いもせず、石が水の勢いに沈まずして流れるのは「重き君も入鹿といふ逆臣の水の勢ひには。敵\*対がたき」政治的状况を示すものと考え、「夫れを知つて暫しの中チ。敵に從ふ父大判事殿の心」は「善くか悪くか」と、その政治的行動の結果に思いをはせるのみである。

そして久我之助は、その吉凶を三つ柏の葉が水に浮かぶか否かで占おうとして川岸に下りるのだが、妹山の腰元たちは「今の小石が届いたか」と喜び、雛鳥も川幅の狭いあたりの岸辺に下り立つこと

になる。久我之助の心が政治的状况の問題で満たされ、妹山の女たちの心が「恋」のことに集中しているさまが、この兩岸の食い違ひによつて鮮明である(注6)。

もちろん久我之助は雛鳥を恋しく思っていないはずはない。が、それは次の、

春心計りがい。染だき合三人詮。方涙先\*立り。(「春」は春太夫、「染」は染太夫、「二人」は両者で語る部分を示す。以下同様)

の掛合いで見られるように、雛鳥と向かい合った時にこみ上げて来る心情として描かれ、それ以外では対入鹿のきびしい政治状況への憂慮の下に抑えられているのである。

従つてまた、これに続く二人の対話も、雛鳥がひたすら添うことの叶わぬのを嘆くのに対して、久我之助は、入鹿の支配下では隣国といえども親しみを通ずることは危険だから、この川の通いも禁じられているのだと、諄々と政治的状况を説くという風である。入鹿支配の状況を深く配慮した上での恋する者の苦悩がここには表明されている。しかし雛鳥はそれを十分に理解する余裕はない。久我之助が「命だに有らば又逢ふ事も有べきぞ」と慰めたのを、「又逢ふ事も有らふとは。別るゝ時の捨詞」と恨む。雛鳥は男の心が自分と同じように「恋」で満たされていないのが不満なのである。それで焦れるのである。そして川の早瀬を無謀にも渡ろうとする。語り手はそれを地の文で「思ひ詰る女氣」と言うが、一途で打算も何もないひたぶるに純粹な心情のあり方を「女氣」と語ることに注意したい。これまでの展開によつて、このような「女氣」と、複

雑できびしい状況の中で政治的的目的のためにさまざま配慮し苦慮する男心との対比が、鮮明に造型されて来た。

このような対比の構造は時代浄瑠璃において決して異例ではない。わたくしは「二谷嫩軍記」熊谷陣屋の作劇法を論じた時（注7）、熊谷と相模・藤の局との間にある「男の世界」と「女の世界」の対立が軸となつて、このドラマの重要な部分が構成されていることを指摘し、それが「男女の別」にきびしい近世社会の矛盾の造型として有効な方法となつてゐることを述べた。その場合、熊谷においては建て前や主義主張、ことに質の敦盛の首を「敦盛の首である」とする政治的虚構を押し通そうとする行動を「男の世界」の特徴とし、そのようなものにこだわらず、自分個人の感情に忠実な、言いかえれば感情という本音に忠実な行動を「女の世界」の特徴と見なした。今「山の段」の検討に当つては、複雑困難な状況を配慮しつつ入鹿討滅という窮局の政治的目標のために苦悩する「男の世界」と、一途に恋に生き恋に死のうとする「女の世界」との対照や齟齬が鮮明に語られ、それを軸として、二人の隔てられた「愛」のテーマが屈折した表現を獲得して行くことを明らかにしたのである。

#### 四

吉野川をはさんでの大判事と定高の対話は、双方とも表に建て前を述べて裏に心底を隠している。近石泰秋氏のいわれる「心底の趣向」である。その建て前には要するに入鹿への忠実ということであり、大判事にあつては、入鹿に背く俸を斬つて捨てるのは少しも不

憚と思わぬということ、定高にあつては、わが子はかわいいから、入鹿のお声掛りを幸に入内させるといふことである。この時、定高には雛鳥に死を以て恋を貰かせようといふ心底がある。にもかかわらず入内させると大判事に言うのは、入鹿への忠実といふ建て前のもとに、せめて久我之助は助けたいと思ふからである（この心底については後述する）。

そう述べ合つた後に定高は、娘が得心せぬ時は斬らざるを得ないと決意を述べ、大判事は逆に俸が得心すれば「身の出ッ世」と、これも建て前で答えるから、この一連の対話は極めて均斉のとれた応酬となつてゐる。その上に定高は「お前のお子息様の事は、真実何ン共存じませぬ」と言い切つたり、娘の入内は嬉しいと「空笑ひ」したりする。それが心底秘匿の言であることは言うまでもないが、この場に即して考えれば、男性的古武士的な強い存在感を示す大判事に対して、今日の言葉で言えばツツパール姿勢を強く出させることによつて、吉野川の兩岸のバランスを取らうとした作者の意図がはたらいっているのであらう。この意味でも対話は見事なまでに均斉がとれてゐる。

しかし注意して見ると表現には男女の対照が際立たせられてゐる。まず初めに子を殺す意志を表明するのは大判事であり、しかも、身の中くまひらの膈せきは殺で捨るが跡の養生。畢竟親の子のな名を付けるは人に間の私に。天地から見る時は同じ世界に涌た虫。別に不便とは存じ申さぬ

という激しく突き放した言葉が用いられる。それに対して定高は「女子の未練な心からは。我が子が可愛て成りませぬ」と応ずる。

そして雛鳥を殺すことについては、

枝ぶり悪い桜木は。切ッて継木を致さねば。太宰の家が立チませぬ

と、より優美な表現で応ずるといふ工合である。作者は念入りに男と女の対照を構成している。「均斉」と「対照」とは表裏をなして進行するのである。

こうして二人は花流しの申し合せをする。そして、その「返ッ答の善ッ悪ッ」によつては、

梁 遺恨に遺恨を重ねるか。春 サア是迄の意趣を流して。中吉野川と落合ふか。

と事の成行きを思い合う。返答の善とは花のまま枝を流す「吉左右」であり、双方の子が入鹿の命に従い、入鹿に忠誠を示すことになれば、入鹿の疑惑も解消して和解も可能になる。返答の悪とは花を散らして枝のみ流す「絶命」の知らせであり、入鹿への不服従は密通の証拠、心を合わせての反逆の証明と見なされ、いよいよ暮る入鹿の猜疑のもとで対立抗争を続けざるを得なくなる。しかも互にわが子を死に至らしめた原因として恋の相手を恨むから、領地の遺恨の上にこの遺恨を重ねることになり、不和はいよいよ深まるわけである。繰り返しになるが、このあたりの入鹿の支配と両家の関係との力学を理解するには、江戸幕府の大名支配の手法のアナロジイを以てするのが早道であらう。

ところで、この問答を締め括る語りは、意外にもこの「詞時そばたつ親と親」の間に微妙な心情の共通性があつたことを暗示する。

梁山と春 大和路分れても。二人かはらぬ紀の路恩愛の。春 胸は

霞に埋もれしヲクリ庵 染春染の

春へ内に別れ入る。(「庵の」の「の」とその産み字は、両床の太夫によつて交互に語られる)

子を思う心は変わらないのであるが、その親の胸の内は霞に包まれたままでそれぞれの「庵」の内に別れて行くというのである。子を殺すのを不憫と思わぬと言ひ切つた大判事の言葉が武士の建て前であつたことを、この地の文の語りはさりと暗示する。さらに掛合いの手法は、「かはらぬ紀の路恩愛の」を両床で語る所など殊にそうであるが、親と親の心が奥底で一致していることをも暗示している。現行の掛合いは複雑に技巧化しているが

大定 かはらぬ紀の路 大 恩受の。(注8)

というように「恩愛の」を大判事(の太夫)に語らせるなど、右に述べた暗示効果はさらに精密に計算されているごとくである。詳しくは「日本古典文学大系」の「文楽浄瑠璃集」の本文を参照されたい。

なお、ここで花流しの合図を思いつくのは大判事であるが、久我之助切腹の場面に至つても、彼はそれを雛鳥を救うために使おうとは思ひつかない。久我之助に「降参承知致せし躰に」知らせてくれと頼まれて始めて、「不和な中々程義理深カシ」と雛鳥を救うべきことに気づいて花を流すのである。これに反して定高は、雛鳥に入内を説得する中で早くも「入鹿様へ降参すれば。清船も命ヲ助る。しらせは川へ流す桜」と言っている。やはり定高は「山の段」に登場した時から久我之助を救いたいと考えていたのであつた。つまり定高の方が娘の恋を理解し、その上に娘の心を思いやりながら

その恋人の命を救うことまで考えているわけで、ここでも「恋」を最も有力なモチーフとして動く妹山の世界が、青山の世界と鮮やかな対照をなしている。女の世界と男の世界の対比の構造は、こうした点においても見逃すことはできない。

## 五

定高を迎えてからの妹山の会話が雛祭のことから縁組のことへと展開するのも、いかにも女の世界らしい。しかしその縁組は入鹿のもとへの入内であった。定高は「女の操」を破れとは言わぬが「貞女の立派様が有りそふな物」と問いかけ、そなたの心次第で久我之助の生死がきまるのだと、「恋も情も弁へて。義理の柵せきとめ」る説得をする。前記のごとく大判事も後に「不和な中カ程義理深カシ」と言うが、両者の言う「義理」が微妙に違うのは、定高の方が恋する女の立場から果たそうとする「義理」だからであろう。

他方青山では、久我之助が父に采女に関する秘密を明かし、その秘密を守ったまま死なせてほしいと願っていた。父は久我之助のこれまでの処置を「神妙の仕かた」と賞し、「詮義の根を断一つ切腹を承認する。しかし青山の父は雛鳥のこと、つまり「恋」については一言も触れず、専ら入鹿との緊迫した状況の中での一身の処し方を考えている。男の世界の論理は貫かれて来た。

しかるに、ここまで来て大判事は本音——親の情——を吐露し始める。「天下の主の御為には。何物あはじの一人など」と強がっているのは「武士の表せ」で、「子の可愛かほゆふない者が凡おおよそ。生有者しやうゆうに有あふか」と言い、介錯してやろうと言ひ出しながら、

### 「山の段」の構造——「妹青山婦女庭訓」研究——

侍かざりの奇羅かざりを飾。いかめしく横たへし大小。髪かみが首を切きッ刀とは五十年來知しらざりし

と、私的な情愛に生きる涙もろい老父へと変身し、男の世界は次第にその相貌を改め始める(注9)。

妹山でも定高は本心を明かす。お前の恋心はよくわかつていたの入内せよと偽ったのは、久我之助を死なせぬためであった。「祝言こそせね。心計こころがけは久我之助が。宿の妻と思ふて死にや」——青山ではまだ「愛」のテーマがひとことも語られぬうちに、妹山ではそれがここまで高潮する。

しかし青山でも、久我之助が切腹するに至って、父の口から息子の恋を認める言葉がようやく発せられる。もつともそれは「一生の名残り女が頬。一目見てなせ死ぬ」という、いさか節くれたった表現ではあった。ところで、この時大判事が「定高とは逆に久我之助の死を雛鳥に知らせようとしている」ことを問題とした梅津氏は、「それは大判事が、久我之助の生死が雛鳥の生死にかかわるとは考えていなかった」からで、つまり「男である大判事には、恋とはこの世で結ばなければならないので断ち切ることのできる、その程度の関係でしかなかった」と説き、定高の「子への理解」との差を「男と女の位相の違い」とされたのは、大筋においてまさにその通りである。

興味深いのはこの時の父に対する久我之助の態度である。彼は「左程ひだりほど狼狽ろうたひ未練な性根」ではないと言ひ切り、女に心引かれぬという武士の建て前を貫こうとする。そして、雛鳥が死なぬように「後室方へ」(「雛鳥へ」ではない)知らせてほしいと願うのだが、

それも「太宰の家」の断絶を避けるためと言い、

入内致せば渠濃<sup>かれが</sup>為。不義の汚名は受<sup>う</sup>けたれ共。是ぞ色に迷はぬ潔白。

とまで言う。「恋」は武士的なストインズムによって極度に抑制されている。父親はそれに励まされたように立ち直って、

不和な中カ程義理深<sup>か</sup>し。命を捨るは天、下の為。助るは又家の為。(傍点は引用者)

と言ひ、花の枝を流すのである。

とはいへ、心乱れて桜の枝に「血の涙」をそそぐ大判事は、もはや定高に向かつて「狼狽<sup>うろた</sup>た捌<sup>は</sup>めざるな」と言い放った大判事ではない。その代りにとでもいうように、男の世界では、清純な若者が暴虐な権力に抗しつつ、かたくなに武士の建て前を守り通して死んでゆく。その姿が強い印象と一種すがすがしい感動を与えるのである。久我之助の性根はここにあるのであって、少しでも色若衆風の演技をまじえてはならない(注10)。

さて、妹山では雛鳥が久我之助の「生」を知って喜び、来世の契りを信じて死を急ぐ。「無事と進行する返<sup>へ</sup>事<sup>の</sup>桜」がこちらからも川に投げられ、それまで交互に進行を見せていた兩岸の舞台が、これからは同時並行して、子を死なす親の苦しみを見せることとなる。大判事は「取り乱し」て「介錯仕<sup>お</sup>後<sup>く</sup>れ」る。そこに妹山から「わつと泣<sup>な</sup>く声」がこだまを伴って聞こえ、大判事は思わず刀を落してよろめき、川に面した障子が落ちる。

春思ひ切<sup>き</sup>つたる首諸共<sup>く</sup>わつと泣<sup>な</sup>く声<sup>こ</sup>答<sup>こた</sup>ゆる<sup>ま</sup>。兼肝に徹して大判事。刀からりと落たる障子。ヤア雛鳥がくび討<sup>う</sup>つたか。春久

我殿は腹<sup>はら</sup>切<sup>き</sup>つてか。

この瞬間における劇的頂点の構造は次のようである。互に相手の真意を知らず、それぞれに心を砕いて来た二人の親が、わが子を殺すという苦痛の極限に達した瞬間に、双方を隔<sup>へ</sup>っていた「障子」が落ちて、すべてを知る。しかもそこで知ったことは久我之助も雛鳥も死ぬということ、つまりは今までの心づかいが水泡に帰したことで、殊に久我之助のために払<sup>は</sup>った雛鳥の犠牲が空<sup>そ</sup>しかったという事実である。障子の落ちた直後の一瞬のうちに、双方にこの残酷な事実が突きつけられるという所に、このクライマックスの見事さがある。長々しい身振り手真似で諒解し合う歌舞伎の演出は、この点で文楽にはるかに劣ると言わなくてはならない。

### おわりに

若者のこの無残な死は弔われねばならない。雛渡しの一節のタタキの哀調を基調とした甘美な旋律や全き和解が、悲劇をしめくくる鎮魂曲となる。その中で、首になった雛鳥を嫁として受け取った大判事が、

迎も死ねばならぬ子供。一ツ時に殺したは。未来で早ふ添<sup>そ</sup>してやりたき。

と述懐するが、これは大判事が前から考えていたことではない。梅津氏はこの点をも問題として採り上げ、それは「定高と雛鳥が大判事に一番いつてほしかったであろうことを、そして、二人の志を知った今となってみれば、大判事自身真実そうであったと思われることを」雛鳥への手向けとして、また定高への感謝として述べたもの



だったと説かれたのは、行き届いた解釈と思う。そこまで大判事の心境は押し動かされ、女の世界と「恋」の意味とに対して心を開くに至ったとも評し得るだろう。そして、それが鎮魂のために大きな意義を持つのである。

わたくしはかつて国文学研究資料館の公開講演会で「男の世界・女の世界——近世戯曲の構造をめぐって」と題し、「山の段」を例とする話をした(注11)。その後文楽が本作を上演した時には、劇場の筋書本に「吉野川の兩岸——『山の段』について——」という解説を書いたが(注12)、どちらも男の世界と女の世界の対照を鍵として「山の段」の構造をあげつらった内容であった。前者の文言は再現できないが、後者は手元にあるのでその末尾を再録し、本稿のまとめの一部とすることを許された。

ドラマは入鹿退治という男の、テ、マ、から、男たちと女たちが、いかにして相手の命を捨てさせまいとするかという問題に移っていたわけであって、考えてみれば、「山の段」の主題としての「愛」は、男の世界と女の世界の対照と矛盾の中で、屈折した表現を獲得していたのである。

もとよりこれは筋書本の解説であって、研究者の目に触れる性質のものではない。今機会を得たので、改めて諸氏の研究を参照しつつ、かねて抱いていた考えに一応の形を与えてみたのがこの稿である。

段切れで大判事が久我之助に「朝敵退治の勝チ軍を草葉のかげより見物せよ」と言い、入鹿退治のテーマが喚起されるけれども、やはり成就されたのは「塵(尽) 未来。五百生迄かはらぬ」死しての

のちの「愛」であった。政治でも謀略でもなく、冷酷な封建倫理の人間性疎離でもなく、最後は女の世界の心情に寄り沿ってテーマが実現されるところに、古典主義的時代浄瑠璃の一つの到達点が示されていると思うのである。

#### 注

- (1) 「妹背山婦女庭訓」成立前後——「芝六住家」戯曲構造論を中心に——(『文学』昭和六十一年六月号)
- (2) 「叙説」十一号。昭和六十年十月。
- (3) 采女は入水と見せかけてどこかに匿われていると入鹿は考えている。
- (4) 急流に飛び込もうとする雛鳥を止める久我之助は、雛鳥が命を失えば自分は母後室からいよいよ深く憎しみを受けることになると言いが、これは親の心理を言い当てている。
- (5) 「妹背山婦女庭訓」研究(『伝統演劇』十二号。昭和三十三年十一月)
- (6) 久我之助と雛鳥の間のこの食い違いについては、早く武智鉄二氏「蜀犬抄」(昭和二十五年四月刊)所収の劇評(昭和十六年執筆)の中に指摘がある。
- (7) 「方法としての戯曲——『二谷嫩軍記』の場合——」(笠間選書「方法としての戯曲」昭和六十三年八月)
- (8) 日本古典文学大系「文楽浄瑠璃集」による。
- (9) 武智鉄二氏が前記劇評中で、ここを大判事の演出の「性根場」とされるのは重要な指摘である。

- (10) 武智鉄二氏の前記劇評中にも同様の指摘がある。
- (11) 昭和五十四年十一月十七日、国文学研究資料館において。
- (12) 昭和五十七年四月、大阪朝日座。